

## 天才ピアニスト・ブーニン 10年の空白を超えて

最難関のショパン国際コンクールに19歳で優勝し、世界に躍り出たピアニスト、スタニスラフ・ブーニンが、10年の療養生活を経て2023年秋から演奏活動を本格的に再開した。旧ソビエト連邦から母と共にドイツに亡命して日本人（栄子さん）と結婚し、日独を拠点に活動していたが、この間、母を亡くし、足を骨折するなど心身共に深い痛手を負い、一線から退いていました。

「復帰を待ち望む日本のみなさんの温かな心、妻の支えと音楽への愛が、私を動かした」とブーニン氏は語っている。

演奏活動を休止したのは2013年の秋でした。

この年の夏、母が肺がんで世を去りました。72歳でした。

私が音楽の道を進むことができたのは両親、とりわけ母のお蔭ですと言っている。旧ソ連では個人の演奏活動さえ国家の統制下に置かれていた。音楽の自由を求め、国を出る決意をした私を支えてくれた。その母を見送り、しばらく公演を見合わせることにした。これまでの疲労がたたったのか左肩が動かなくなり、18年には自宅で転倒して左足首を骨折し、「もう生きている意味がない」とさえ思った私に、妻がエネルギーを吹き込んでくれたのです。

「ブーニンさんの音楽を聞きたい」、「復活を待っています」といったお便りが事務所にたくさん届いていたそうです。

それらの手紙やメールの内容を妻が私に読んで聞かせ、その気持ちに応えたいと思いました。私にとって音楽は最大の関心事。趣味として文学や死を楽しむのは心地よいが、それに格別の意味を見出せない。生きる気力を失っていた私の心にただ一つ、残ったのは、音楽への愛だったのです。「もう一度、音楽の舞台に戻ろう」という妻の働きかけと、私の心の中の音楽への愛が一つになった。

映像：NHKE テレ収録

文献：毎日新聞電子版

## 経 歴

1966年、ソ連時代のモスクワ生まれのスタニスラフ・ブーニンは、父は当時の名ピアニスト、祖父はモスクワ学院の名教授ギレリスリヒテルの師、母もまたピアニストでモスクワ音楽院出身で同教師である。4歳から母にピアノの手ほどきを受け、その後も英才教育を受ける。そして、17歳でロン＝テイボー国際コンクール（パリ）で最年少優勝を果たす。1985年19歳で第11回ショパン国際コンクール優勝。